

の上に思いを馳せる時、目には熱い涙が浮かんでくる。

戦争とは悲惨である。尊い多くの人命を奪い、国土は破壊され、住民は巻き添えとなり、人生不幸の始まりともなつて行く。

戦争は絶対にしてはならない。させてはならぬと思いつつも、でも我々は聖戦と言う美名のもとに戦つた。

あ、また大勢やられたなあ。弱小部隊になりながらも自らを鼓舞し、重い背囊にそして銃、我が身の宿命の順番を待ちながら隊列の中の一兵士となり、徐州戦最後の要衝、勝陽山目指して進んで行った。

## 体験記

― 去る大戦を省みて ―

兵庫県 中西 文次

私は、この大戦において、支那事変を通じて六カ年半有る余従軍し、また従属して参りまして、幸い九死に一生を得て生還した一人として、その経過を発表させ

て頂きます。

私は昭和十二年七月末ごろ、日支事変勃発と同時に召集され、姫路磯谷部隊前野部隊本部（師団輜重隊）に編成され、歓呼の声に送られて勇躍出征しました。わが部落からは六名の友達と同時に動員され、私の外五名は全部姫路歩兵三十九連隊（沼田部隊）で、日支事変中勇名を轟かした部隊でありました。

渡支後は泥寧深き河北省、中支、南京、漢口作戦、京漢線守備等、山岳戦も含めて二カ年半にわたり転戦して参りました。

磯谷部隊は元姫路第十師団で第一線攻撃部隊です。立ち向う所、彼我共に犠牲者は夥しく、多くの戦死傷者が出ました。現在の中国からいえば侵略掠奪行為かも知れませんが、皇軍の名のもとには絶対服命、完遂せねばいけなかつたのです。それ故最前線戦闘部隊である歩兵また特科掩護隊、いづれも相手と交戦せざるを得ない任務です。したがって損耗率は高く、戦死戦傷かつ無理な体力の酷使から病に倒れた将兵が多かつたのです。

特に激烈だった中支戦線、中でも徐州戦のごときはわずか一週間足らずだったが、突撃隊の沼田部隊、赤柴部隊は隊員の半数以上の損耗を蒙っています。武勲を争う焦りの作戦だったようにも思われました。まことに犠牲者に対しましては御国のためで致し方なしと思うが気の毒でなりません。特攻決死隊の自爆的勇士は別として、ほとんどは命を惜しみ、むだに捨てたくはありませんが軍規には逆らうことは出来ません。戦勝を誓いながら肉親妻子のことを思いながら、その名を叫んで悲壮な最後を遂げられたのが真の姿です。

私は輜重隊本部の将校当番兵で自分の本務は全うして参りましたが、戦闘部隊でなかったから難を免れたのです。だが、われ等の部隊は防備力が乏しいので一度敵の急襲に遭遇すれば、たちどころに全滅のおそれがあり、そのような危機も数々ありました。何とか切り抜け、苦難を乗り越えて、二カ年来の戦線を経て、昭和十四年の師走帰還致しました。

引き揚げ途中、私は熱病に冒されて入院し、少し遅れて原隊に一人で復員しました。そして懐かしの我が

家にも寂しく裏道から人知れず帰り、家族の出迎えもなく「今帰ったよ」と家族に告げた状況でした。このことは今も忘れません。一生で一番嬉しい筈の元気な凱旋なのに。郷土の同時出征の五名の友達は全員が徐州戦前後に散華したのです。この歓喜に満ちる生還も自責の念に堪えず、遺族の方々に自分一人が元気な姿で再会する時、申し訳ない心情が暫くの間消えませんでした。

戦争は悲惨極まりないことです。当方は勿論相手方にも罪なき人命と計り知れない物的打撃を与えています。

さて、当時の日本の国情は農業立国で狭い国土では活きる道がなく、東洋平和の名をかりて、朝鮮、台湾、樺太、満州と占有して活路を求めていったと思います。相手の権利を無視して蹂躪していたかも知れません。

かくして世界各国から憎まれ、ついに経済封鎖や、国際連盟脱退にまでいたり、太平洋戦に突入した感が致します。支那大陸から北方、南方へと戦線が拡大し、昭和十七年半ばごろより敵の反撃著しく、戦況は一変

しました。

私は昭和十七年五月初旬、呉海軍施設第十二設営隊に徴用工員として入り、外地派遣を志願しました。呉港を出帆した今村部隊（設営隊）千二百名は南洋サイパン島沖に集結しました。帝国海軍三十隻の艦隊とミッドウェイ島付近にての海戦に参加、設営隊の任務はミッドウェイ島に飛行場設営でした。上陸中止、後退命令で各御用船は自力で洋上退去せよでした。私達要員は船上にてウロウロするだけでした。

その時すでに日本艦隊の姿は無く、全速で走っているのは私達だけでした。後で仄聞すると主力戦艦、航空母艦その他敗退戦とのことでした。私達の船は無傷でソロモン群島北端のニューアイルランド島カピエン港に入港、上陸、飛行場建設の任務についた。

ジャングルを切り開いての作業で、原住民カナカ族と総力を挙げて作業に取り組んだ。一年半の日時を費やしてようやく二カ所の飛行場と飛行機を隠す掩体壕の構築、その他の施設を設営しました。当時、熱帯病のマラリヤまた潰瘍等にて倒れるもの多く、医薬も充

分でなく病死したものの数知れずでした。飛行場も友軍機が一機飛来し着地すれば必ず米軍機が来て爆弾の雨でした。

一度叩かれると後の修理は大変でした。いつ敵が上陸して来るか分らず防備も大変です、一般軍人も少ない小火器です。軍属にあつては小銃もなく手製の手榴弾（瓶詰ダイナマイト）と竹槍でした。いつも最後の覚悟はしていましたが心細い限りでした。仲間の中には恐怖のあまり半分気狂いのような者も出た。

昭和十八年十月、交代命令で御用船一隻が接岸した。南方よりの帰還はこの船が最後とのことでした。駆潜艇が一隻、前になり後になりして敵潜水艦を警戒してくれました。一カ月余、ようやく横須賀港に入港しやれやれと思いました。陸路呉基地に向いました。

終戦間近にまた陸軍に召集されて入隊、混成築壕部隊で短剣一振、飯盒に竹筒水筒で軍隊とは名ばかりの乞食兵隊でした。

かくして八月十五日、天皇陛下のお言葉を拝聴して私の長かった戦争も終わりました。二度とこのような戦

争を行わぬように子々孫々に申し送り、戦没なされた御英霊の安からぬことを祈ります。

## 桂林攻略戦の回想

長崎県 宮崎 新作

私は小倉にあった西部七十三部隊（野戦重砲兵第六連隊）へ、昭和十七年五月十五日教育召集されたのです。大正十年九月十五日生まれですから、現役なら一月に入営のはずでした。

同年七月十八日、門司港出港、八月一日、上海上陸、十九日、湖北省雲溪の呂第五九二〇部隊、野戦重砲兵第十四連隊に入隊して、第四中隊に配属されました。

岳陽県は非常に暑い所で、そこで一期の教育を受けたのですが、私は下士官候補志願をしていたので、鉄道警備派遣、その他の勤務は免除されましたが、敵襲を受けることも、しばしばありました。下士官候補者教育は南京の榮第四五一六部隊という所で、十カ月間、

相当に厳しいものでした。

昭和十九年二月に二十四名が原隊に復帰しましたが、部隊は新陽に集結中で、桂林攻撃の訓練をしていました。二十四名全員が伍長に任官していて、各地の兵站で食糧その他の支給を受け、各地の駐屯地の部隊が護衛して、順送りに部隊に帰ったわけです。

同年十一月九日、桂林総攻撃第一日は漸く日没を迎えた。正面の広部隊（第五八師団）右翼歩兵部隊の第一線は一の高地、二の高地の山麓前面に張り囲らした鉄条網に前進を阻まれているのが観測された。

桂林の総攻撃は午前五時二十分直協砲兵諸部隊の一斉射撃により始まり、その砲声は暁を破って殷々として山野にこだました。七時半久しぶりに見る友軍機が飛来し市街上空を飛ぶ。我が部隊は友軍砲兵諸部隊の最右翼に砲列を布き、桂林北端西側のコンクリート三角壕の屋上に陣するわが中隊観測所からは、朝霧にまつまれた一の高地・二の高地の敵火点やトーチカに炸裂する弾着は観測できたが、逆光に遮られた山並みは墨絵そのまま、岩肌に囲まれた敵陣地への着弾効果